

総有を取り戻せ！～戦前期の農民運動と今～

○農業の商品化・百姓の小作化

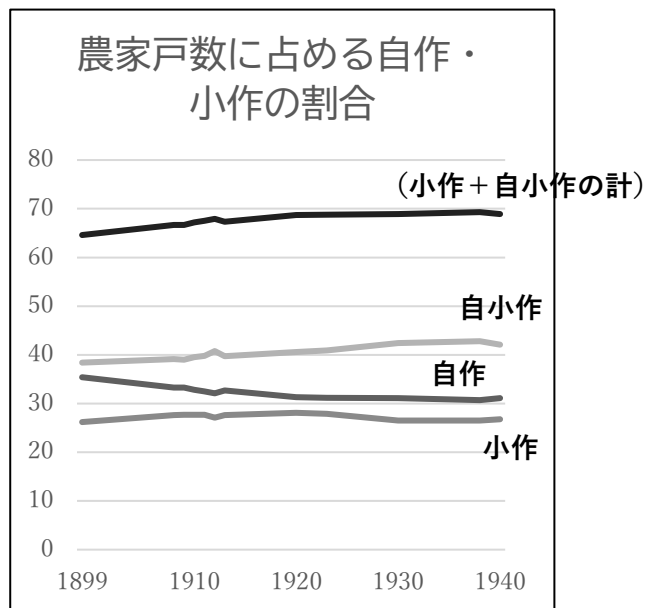
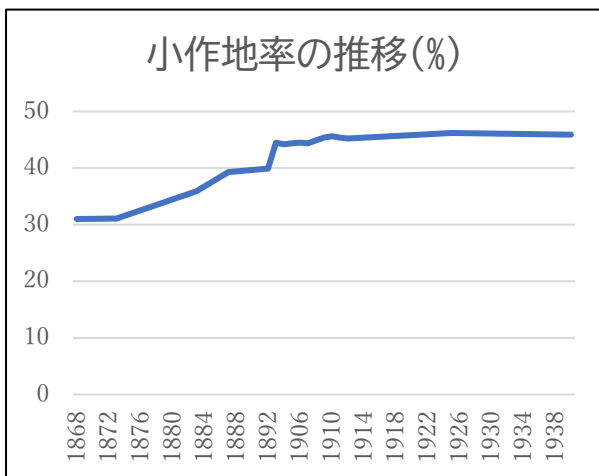
<前史>

日本の伝統的農村＝自給自足

- ・江戸時代前期、生産性向上で余剰米や商品作物栽培の余裕が生まれる。
➡市場での売買を通じ、農村に貨幣経済が浸透・格差が拡大。
- ・18世紀後半、有力百姓が困窮百姓から田畑を質にとって集め、地主に成長。
➡田畑を失った百姓は小作人や地主の年季奉公人に転落。
➡小農民・小作人らが団結し、豪農地主との対立を深める（村方騒動）
- ・19世紀前半、地主や問屋ら(＝資本家)が農業から離れた年季奉公人らを集めて工場制手工業をはじめる。➡賃労働者の誕生

<近現代>

- ・明治に入り、地租改正で現物納の年貢が金納の地租に代わる。
- ・1880年代の緊縮デフレ政策で大量の自作農民が土地を手放し小作に転落。
➡土地を失った農民の一部は都市に流れ込んで貧民に。
➡豪農の寄生地主化、資本家化が進む。
- ・以降、小作農家・小作地率は増え続ける。
(一方で耕作面積も増え続け、自作地を持つ小作農民も増える。特に1900年代からは5反未満の零細農家は減り、貧農・中農層が増え続ける)



○増え続けた小作争議

・20世紀初頭、発展する大都市の近郊を中心に、より「商品的農業」が盛んになり、農民も経済に敏感になっていった。

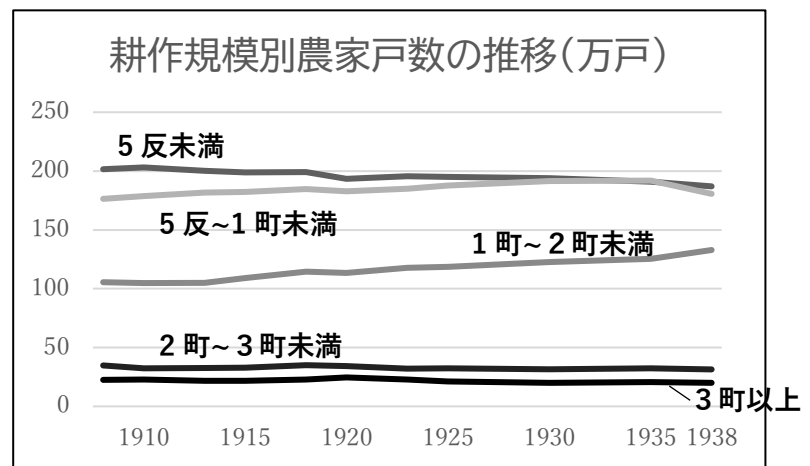
➡第一次大戦後の不況下で小作争議が活発化し、戦後恐慌で爆発。1922年の日農結成につながる。

・1910年代までは戦争や投機的買占めで米価は高騰していたが、20年代以降は一転、朝鮮からの輸入米増加で米価低迷。労働者の賃金も低く抑えられ、一層デフレになり農家も窮乏する悪循環。農村が基盤の軍部は、「農村の窮乏救済」を名目に戦争と侵略を進める。

・1930年、昭和恐慌による農産品価格暴落と、失業者の帰農なども相まって農業恐慌に。小作農家の所得は7割減となり、小作争議が再び爆発。

○左派的・政治的 だった農民運動

➡草稿参照。



○「99%の勝利」だった？王番田（おうばでん）大争議

王番田…語源は「王果て」=1300年代、南朝の宗良親王が討ち死にしたとの伝説に由来。➡かなり古い村ではないか。

・大争議当時の王番田集落の構成

農家 74 戸 地主（耕作面積より所有地が大きい農家） 30 戸

—寄生地主（耕作規模 5 反未満） 6 戸

—自作地主（5 反以上耕作） 24 戸

小作（所有地より耕作面積が大きい農家） 40 戸

—自小作 28 戸

—純小作 12 戸

純自作 4 戸

- ・全農王番田支部の組合員は自作地主 1 名、自小作・小作 29 名
耕作規模別では、1 町～2 町の中農が 22 名だが、組合長は純小作で 7 反経営の貧農 S、一方幹部のうち 3 名は 2 町以上を経営するなど、各層に渡った。
彼らが団結して、最後まで一人の脱落者も出さずに闘った。
- ・一方、地主側は足並みそろわず、妥協者続出。強硬派はわずか 4 名で、なかでも中心は約 9 町を所有する「ほぼ」寄生地主の M。

➡「村民の団結」VS「大地主 M」の構図？（ただし豪農はいなかった。）

それでも、仮想「99%vs1%」の闘いに勝利した意義は大きい。

○農民はなぜ体制と闘い続けたか

- ・政治的であった理由
村においては、江戸時代から豪農が村役人を務め、不正が横行。明治に入っても王番田のように重立制が残るなど、地主との闘いと村政の民主化や公正を求める闘いが直結していた。
- ・左派的であった理由
戦争や侵略・資本家の都合で、急騰と急落を繰り返す米価。戦争になれば人手を取られ、不況になれば失業者を押し付けられ、その後も大量の疎開者や引揚者を引き受けるなど、農村は常に都市と資本家の都合に振り回されてきた。
- ・闘い続けられた理由
上記のように「地方 vs 中央」の構図や非資本主義的な生活実感など、「国体・私有財産制」と本質的になじまなかった。
また、労働者と違って自ら食い扶持を生産していた。（＝支配階層に依存していなかった。）

★左派的であった本当の？理由

日本の伝統的農村には、「占有」に対立する「総有」の価値観が根付く。古くから他人と・自然と結びあう関係性の世界で生きてきた人々の実感。「村も田畑も自然も、共同体のみんなのもの」。「みんな」とは「今生きている我々・先祖・そして自然」。

都会は、資本主義のルールに即して土地も暮らしも「記号化」されているが、農村は資本主義社会になっても基本的な風景や暮らしぶりは変わらない。日々結びあいを実感して生きているから、総有の価値観も簡単には消え去らない。「みんなのもの」を独り占めして儲ける地主との闘いの歴史であった。

※かつて大乘仏教は異教であったが、農村の自然観・生命観にマッチしたため容易に受け入れられた。

➡共産主義・社会主義も「受け入れる土台」があったのでは？

○これからの農民運動と労働運動

・換金不可能な価値（自然や田畑、人間関係）に囲まれて生きる農民。

⇨お金で買えるものに囲まれ、「総有」を実感できない賃労働者。

「革命」に近いのは、怒りの蒸気を持った賃労働者。

「革命後の社会」に近いところにいるのは農民。

資本主義的な価値観で行う革命には未来がない？

では、極論＝都市を農地に戻すか、都市住民が全員地方に移住する・・・しかないのか？

➡否、都市にも「総有」（≡「公共」）は存在する。

それは職場や学校かもしれないし、商店街や地域の寄り合いかもしれない。

「関係性」を実感できる土台作り。

その土台の上立って、生産手段を自分たちの手に取り戻す運動。

資本を総有化する。それが広い意味での労働運動であり、革命。

・一方、地方では大規模農業や種子の私物化など、農村の「記号化」が進む。

➡田畑・山林を資本家による侵略から守り、再び総有化する闘い。

それが農民運動であり、農村における革命。